

松波むかし語り—ここに生き続けて その13

今回のお客様

2丁目老人会、「松波清和会」会長の

川島 浩子 さん 81歳 2丁目

“何でも手を抜けないのは母親譲りでしょうか。
私にとっては、水墨画も老人会も同じなんです”

—80歳を越えるいまも、お母さんの教えをきちんと守っておられる。きつとすてきなお母さんだったんでしょね。



先日の町会の「作品展」にすばらしいかけ軸を出展した川島さんは、2丁目老人会の会長として努力されていることがあります。それは絵手紙。年賀と暑中見舞いの年2回、老人会の会員に送って喜ばれていることです。「100円のハンカチを贈っても好みもあるでしょうし、50円のはがきでみなさんを励ますことができればと思って」と、その動機を語ってくれました。最近は返事に励まされたりもするそうです。

川島さんは成田空港の近くの富里町（現在は市）に生まれました。“田舎のスーパー”を営んでいた生家では、運搬用の頑丈な自転車に一升瓶などを載せて配達に回っていたそうです。女学校時代はちょうど戦時中、柏にあった日立の工場に通い三交代で働きました。「私は体が大きかったでしょ、“五尺旋盤”という大型旋盤で武器の部品を造っていました」。男性たちが兵隊にとられ人手不足だった時代、その途中から小学校の代用教員の道へ進みます。が、教員生活もお母さんの看病のために6年で断たれます。「若いからぐっすり眠ってしまうでしょ。だから母が苦しくなったら起こしてもらうために、“二尺指し”の物差しで突っついてもらうようにしてね」。急な発作に備えて、川島さんは注射の打ち方も練習したといえます。

その川島さんが昭和29年、松波町にやってきたのは結婚がきっかけでした。「1日おきに通ってきてお見合いを勧められ」、東電に勤めるいまのご主人と結婚。「そのころこのあたりは家が6軒しかなくてね、家から線路を走る電車がよく見えました」。50歳を過ぎた頃、お知らせで町会の2階で水墨画教室が開かれることを知り、水墨画と習字を習い始めます。この人のすごいところは、何でも徹底してやらなければ気が済まないこと。“水墨画をやるなら軸装も”と、掛け軸の作り方を習うため茂原まで通う徹底ぶり。それが効を奏して、「装美展」で優勝したことも。なぜそこまで？「母親が厳しい人だったから、いいかげんなことができない性分なんでしょう」と笑います。洋裁を習って、80歳を超えたいまもご自分の着るものはできる限り手作りすることのこと。

60歳を過ぎて川島さんは老人会に入会、その後「昔のことをよく知っていると言われて」2丁目の老人会、「清和会」の会長に座り、いまは会の仕事に忙しい毎日です。80歳を過ぎたいまも、お母さんのいましめを心に刻む川島さんです。



展覧会出展作品が並び改装アトリエにて 全て自作の掛け軸や油絵、墨絵